Owner Of Spell

鴨音 浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｏｗｎｅｒ　Ｏｆ　Ｓｐｅｌｌ

【Ｎコード】
Ｎ０１３９Ｎ

【作者名】
鴨音　浅葱

【あらすじ】
「今でも、俺は――――」
過去を捨て、過去に縋る彼女は、そうして全てを葬るだろう。
＊個々の正義を振りかざしあうちょっぴりダークなファンタジー。

1

死を見て、目を覚ました。
テルトスアの王城の地下牢に、可憐で、重い、そんな音が響く。
一定の速さで何かを刻んでいるかのような音。
決して軽んじてはいけないのだと、本能が必死に囁きかける一つ一つに、囚われた魔物は顔を上げた。
誰かの靴音だと気づくまで、どうしてこれほどに時間を要したのか。
きっとそれは、眠りが深かったから。
「魔力主……」
音の主は亜麻色の波打つ髪に表情を遮られ、どうしても憂いに見えて仕方が無い。
何を憂鬱に思っているのだろう。
伏し気味の目の水色は、茜に混ぜられて、鈍く汚れている。
「この世界は、まもなく混乱に落ちるはじめるでしょう」
牢に漏れ落ちる微かな夕日が彼女の頭で光を返した。
銀を含んで更に痛みを増した夕日が、囚われたものの目を刺す。
頭の奥が、訳も無く痛い。
「それを、貴女が救うのです」
彼女は魔物にそう告げた。
魔物は彼女を見つめ返した。
「貴女が英雄になるのです」
冗談ではない真剣さ。
けれども真っ直ぐではない思想の欠片。
女王は何を欲しているのか。
絶えず流れる不穏の静寂の戦闘曲を打ち破るように、囚人は呟くように答えた。
「俺は今でもこの国の王が嫌いなんだ」
気だるいように演じているのかもしれない緩い言葉。

「逃げ出すと、普通分かるだろう」
吐き捨てるように出した答えを、彼女は普通の事だと言うように、何事もないように笑った。
「貴女は逃げないわ」
その言葉が、ひたすらに隠そうとしていた真理を突いて吐き出させようとしているかのように、魔物の胸を抉る。
気づかれたのか、否、単に勘のいい姫君だというだけなのか、確信犯。
「栄光の言葉に飢え、求め、全て変えようとした貴方は逃げられないわ。レッシュ＝クレンス」
魔物は毛を逆立てて震えた。
嫌な懐かしさを煽られたから。
どうして、と問う前に自分自身で何もかもを理解してしまう自分が、どうしてだろう、悔しい。
心なしか憂いていた彼女の表情は少し明るくなり、そしてほんの少しの恐怖を漂わせたように感じる。
それを見て魔物は絶望の淵にまで走らされる。
そして囚われているこの現実に、ただ言い返すだけの、安い言葉を掴んだ。
「違う」
だというのに、答えははっきりと返っていく。
非情だ、異常だ。
「ヴァシア＝クレンス、だ」

Ｏｗｎｅｒ　Ｏｆ　Ｓｐｅｌｌ　－水晶の剣－

＊１＊

「はい、どうぞ」
心地良いようなグラスの置かれる音。
中では不恰好な氷が水に浮いている。
それを見つめながら、彼女はグラスに手を当て、目を伏した。
「ありがとうね。こんな暑い中、いろいろしてもらっちゃってさ」
少年は自分の分のグラスを持って彼女の向かい側に座る。
「でも、本当、助かったよ！　俺一人じゃ手がまわらないところまでしてもらっちゃった」
嬉しそうに明るく話す少年とは対照的に、彼女は机の木の節でも見つめているのか、上の空なのか。
「ねえ、聞いてる？　ヴァシアー」
話を聞いてもらえていないと思った少年は、机に顔を乗せて不安げに聞いてみる。
「聞いている」
イヤリングの金属音を鈍く鳴らしながら、彼女はやや顔を上げ、答えた。
考え事をしていたのだろうか。
何処と無く不機嫌そうにも見える。
いや、元からそういう顔だった、ような気もするのだが。
「あ、ごめん」
「何故謝る？」
「いや……」
言葉を濁しながら少年は思う。
彼女という人間が全くつかめない事に困惑し続けている。
テルトスアで会ってからここ、クリノト・スファンに来るまで、彼女において分かったのはほんの少しだけ。
女であること、桁違いの魔力と二色の髪を有す未解明の存在である「魔力主」と呼ばれる者であること、それとヴァシア＝クレンスという名前のみである。
それから、本当にそう思っているのか分からない思想だけだ。

彼女はこの何処か虚ろな表情と揺ぎ無い力で本当にそれを望んでいるのだろうか？
グラスを手で包みなおし、また目を伏して何かを思う表情からは、何も伝わってはこない。
顔を覗き込みながら、この沈黙が嫌になった少年は立ち上がってみる。
「お礼、と言ったら何だけど、ご飯作るよ！。ねえ、何がいい？」
何か希望を言うとは思えなかったが一応聞いてみる。
答えはなんとなく想像がついているが。
「オムライス」
「へ？」
つい言葉が出てしまった。
自分から聞いておいて、とは思ったが、てっきり「何でもいい」と返ってくるとばかり思っていたため、頭が一瞬混乱したようだ。
「何だ、その顔」
「あ、ううん。何でもないよ。じゃあ作るね」
しかもオムライスとは。
少々子供っぽいのが不思議な気持ちを膨らませる。
そっとヴァシアの顔を遠くから覗くように見ると、少しだけ嬉しそうな顔をしているように見える。
できればいつもその穏やかな顔でいてくれればいいのに、とため息が少し零れ落ちた。
「ミュークトー」
少年が料理をはじめようとすると、自分の名前を呼ぶ声と一緒に家のドアが開いた。
植物とは違う色味の黄緑の髪と、透き通った琥珀の瞳。
その瞳はゆっくりと家の中を見渡して、ヴァシアの方へと視線を落として落ち着いた。
「ミュークト？」
にしては違いすぎる。

服装も髪も目も雰囲気も、多分種族も。
その前に性別が。
見つめ返す赤い瞳は緩くほの暗く、まるで夜のよう。
どうしてだろうか。
心臓を刺しつくすような痛みを感じている。
「クジーア！」
ミュークトは台所から彼の元へと走ってきた。
驚いているの半分、もう半分は喜びと怒りだろうか。
「ミュークト！」
今度は本物だ。
「ああ！　もう！　何処行ってたの！」
「いろいろ俺も忙しいんだよ！　連絡が無かったのは謝るって！」
長身の彼に目線を合わせるように上目遣いと爪先立ちをしながら、
母親がするように心配ゆえの怒りを見せる。
しかしその顔もすぐに崩れる。
嬉しそうな満面の笑顔にうつりかわり、クジーアの両手を素早く取る。
「まあいいや！　お帰り！」
「た、ただいま……」
早すぎる切り替えに困惑しつつ、しかしあのまま説教が続いたら面倒だっただろうと思えば、これでよかったのだろう。
握られた手を優しく解きながら、彼は彼女の斜め向かいに座った。
「お昼食べてないでしょ？　オムライス作るから待ってて」
「お、ありがと。　あ、水、貰えっか？」
「ああ、ごめん、出しちゃった」
どうやら彼女に出したグラスが彼のものだったらしい。
両手で包まれた、もうそれほど冷たくは無い輪郭に、ヴァシアは視線を落とした。
「じゃあ妹の貸してくれ」
「はーい」

ミュークトは軽やかな音を引き連れて台所へ戻っていく。
クジーアに久々に会ったのが嬉しくてたまらない、まるで物音がそう言っているように聞こえる。
その後姿を見送りながら座りなおして前を見ると、斜め向かいの彼女と目が合った。
いつの間にか顔を上げていたようだが、グラスと手の関係はそのままのようだ。
赤い目は彼を見つめているのだが、ただ見つめているだけで、一言も言葉を発しない。
彼は目を逸らそうとしたが、いや、これほどはっきりと目が合ってからでは失礼すぎると思い、声を掛けてみることにした。
「あ、どうも、はじめまして。　ええと……　俺はクジーア＝キリュ。　よろしく。　それで、君は？」
「ヴァシア＝クレンス」
目を合わせたまま、彼女の口だけが動く。
機械的というのはこういう事を言うのだろう。
ただ動いている。
まるで、動力だけを持った人形のように。
「はい、お水」
痛みを感じるにもかかわらずその赤い目に見入っていると、カップと机の当たる音がした。
「ああ、ありがと」
柔らかい色合いの花柄をしたマグカップに、大き目の氷二つと、澄んだ水。
そしてまた台所へ戻っていく少年の足音。
そっと彼女の様子を伺うようにしながら冷たい水を含むと、さっきと同じようにまた目が合う。
こういうときは驚いて、なのだろうか。
水を噴出しそうになったのを必死に押さえマグカップを置き、どう話を繋げればいいのか、そんなことを十分に考える暇も無く、とり

あえずなんとなく聞いてみる。
「出身は？」
「クレア島」
本当に一言だけそう答えられ、話は終わってしまった。
沈黙は辛い。
目が合い続けているならなおさらだ。
「と、年は？」
「……17」
「そ、そうなんだ！　俺は19だから、年上になるな」
「そうだな」
また終わってしまった。
分かっていたような気もするが、どうやら彼女には会話を続けようとする感覚が無いらしい。
しかし、それならばどうして目を合わせ続けてくるのだろう。
話しかけられるのを待っているのか、その彼の目が珍しい黄色をしているからなのか、もしかしてただぼうっとしているだけなのか。
いずれにせよ、このままでは二人は無言で、何だか気まずいような不思議な気持ちのまま見つめあうことになるのだ。
どうにか打破したいと強く思うクジーアは何かまた話題を探す。
暑いほどに晴れたスファンの日差しによるものとはまた別の汗をかきそうになる。
そのせいなのか、全く話題が浮かばない。
今日は暑いですね！　ああ
その格好暑くないんですか？　ああ
魔力主ですよね？　ああ
駄目だ、話が続かない。
会話のキャッチボールとはよく言うが、これでは会話のボールキャッチである。
とりあえずごまかしがてら水を一口。
冷静になれよ、といわんばかりに冷え切り、井戸の水だろう、甘さ

が通り過ぎていく。
本当は味わっている暇など無いが。
順調に減るカップの水を見ながら、クジーアは限界を感じていた。
どうして久しぶりの帰郷で限界などという言葉を連想し、その状況に陥らなければならなかったのか、とりあえず自分の不運等をそれとなく呪った。
そして強く、いち早く、オムライスが完成するのを心から願った。
らしくもなくマグカップを両手で包み込んで握る。
沈黙が相変わらず痛い。
もしかして赤い目から感じるあの痛みより、痛いかもしれない。
「おまたせー！」
心の奥底から願っていた一声。
彼には天使か何かに思えたに違いない。
トレーに三つのオムライスとサラダを乗せて持ってきたミュークトは、ピンクのエプロンをしている。
「待ってました！」
本当はピンクのエプロンにつっこみたい。
だけどもうそれどころじゃない。
一刻も早く、この黙りこくった空間を開放して欲しい、その思いでこの部屋は一杯だ。
「何だよ！　クーとヴァシア、おそろいじゃん！」
上半身だけ振り返るクジーアを見て、ミュークトは笑った。
「え？」
恐る恐るヴァシアの方を見てみる。
手でグラスを包むように持って、ミュークトの運んできたオムライスとサラダを見つめている。
しかも急に嬉しそうな顔で。
言い表しがたい気持ちが、一瞬体中を走り回った。
「まあ、いいや。　ねえ、早く食べよう！　美味しくなくなっちゃうよ」

少年はほとんど気にしていないようで、手際よくテーブルにオムライスとサラダを並べる。
すこし酸っぱい、懐かしいトマトソースの香りが漂う中、そっと、本当にそれとなくを装い、彼はカップから手を離す。
陽の光を浴びて熱を持った肩当てと、すっかり湿ってしまったグローブを外しながら、いろんなものが一緒にはずれたような気がした。

＊　＊　＊

「はあい、冷たいお茶」
不思議な気持ちと甘酸っぱい香りはとっくに消え、何事も無い時間が過ぎているような気持ちを感じながら、彼は彼女の存在に目をやる。
「ありがと」
それだけは、日常をはみ出している。
「はい、ヴァシア」
魔力主―これまで何度か見かけたことはあった。
性別も容姿も様々。
きっと性格も普通の人と同じように多種多様で、心を持ち、喜び憂いて生きているのだろう。
「ああ……」
でも、彼女は普通の人と同じと言えるのだろうか？
会って数時間、だというのに訳も無く妙に惹かれていく心がおかしい気がする。
どうしてあの赤い目は、何よりも心を吸い込もうとしてくるのだろう。
「クジーア……」
「あ、ああ」
「汚い」
慌てて彼は口元をお絞りで拭いた。

大分長く見られていたのかもしれないと思うと、非常に恥ずかしい。
俯いて、ほんの少しだけ赤くなった顔から彼女の顔をのぞいてみるが、やはり何処と無く虚ろに見える。
笑いもしない、らしい。
「そういや、何でヴァシアは家にいるんだ？」
「テルトスアで会ったから一緒に来たの」
クジーアはよく分からなくなった。
何故テルトスアで会ったら、はじめまして、でも一緒に来るんだ。
昔から行動、言動、こんなものだったが、明らかに違和感がある。
典型的な「抜けている人」であるミュークトを使いこなすのは、なかなかに難しい。
「もう少し詳しく言ってくれるか？」
「テルトスアに行ったついでに、お城の庭見てきたんだけど、そこで会ったから一緒に来たの」
「もう少し詳しく」
「母さんのお見舞いにテルトスアに行ったついでに、お城の庭見てきたんだけど、そこで会ったから一緒に来たの」
「あの、もう少し……」
「ミュークトが……」
急に別の声が会話に割り込んできた。
決して大きな声ではない。
けれども合わせたかのように、二人の話は止まる。
「ミュークトが、行き場の無い俺を連れてきてくれた、というとこだろうか」
新しくした冷たいお茶のグラスに、同じように手を当てている彼女は、視線をそのままに呟いた。
戸惑うように、二人は会話の型を解く。
「そうか……」
行き場の無い魔力主。
出身はクレア島と言っていたが。

いや、何かあったのかもしれない。　聞くのをやめた。
少年は何も聞かず、無力だと語る力の核そのものを、ただ守ろうとしたのだろう。
「そうだったんだ……」
「え」
違ったようだ。
「何だよ！　そうだったんだ……って！　お前が何で今納得してるんだよ！」
「だ、だって、そういう意味じゃないと思って！」
「じゃ、どういう意味なんだよ！」
クジーアは心の中で反省を繰り返した。
一人しんみり、行き場の無い彼女の事を哀れみ、その彼女を守りたいと思った少年に痛く感動してしまった彼は、自分が恥ずかしい。
その前にそんなこと思ったことが恥ずかしい。
顔は真赤だ。
「俺は！　何だか、放っておけなかったんだよ」
どんどん小さくなる少年の声は、多分そう言っていただろう、ぐらいにしか聞こえなくなっていた。
躊躇ってしまうような事。
本人の前では、そうそう言えない事。
「放っておけない……ねえ……」
散らかってしまった頭の中を整頓しながらお茶を一口。
彼は彼女を一瞬盗み見る。
あんなに自分のことでいろいろ言い合っていたのに、こちらを向いてはいなかったようだ。
お人よし、何処か抜けていて、天然というものにあたるのだろうか。
少年を時々無性に心配になるのは、心にまで義務付けた、必要も無いだろう兄貴面のせいなのだろうか。
「本当、母親似だな」
呟いた言葉は花柄のカップの中に吸い込まれていった。

守りたい、あながち間違ってはいないらしい。
「え？　何？　何か言った？」
「いや、何でも」
「ふうん」
何か引っかかるような気がしつつ、ミュークトは氷で少し薄くなったお茶を飲んだ。
そして何気なく前を見てみると、ヴァシアがこちらをじっと見ている。
さっき言ったことを気にしているのだろうか？
それとも殆ど二人で会話していて、空気のようになってしまったことへの不満だろうか？
目が合う。　無言。　気まずい。
「あ、ああ！　そういえば、クジーアは何してたの？　もう1年近くあってないよ。　ね、ヴァシアも気になるでしょ？」
わざとらしくでもいい。
話題をふって彼女をどうにかせねば。
「ああ」
本当にそう思ってますか？
そんなことは無いですよね。
「俺はなあ、まあ、いろいろありまして……」
「……なんではぐらかす気しかないの？」
なぜか完全に逃げる準備を整えているクジーアの腕を掴む。
「そ、そんなわけねえだろ！」
「じゃあ、座ってよ」
渋々座るクジーアの腕は掴んだまま。
「そんなに握らなくてもいいんじゃないですか？　ミュークト＝イーディアム君」
「だってさ……」
「あ！」
急にクジーアは何か思い出したらしく、言葉をこぼした。

「イーディアム……そうだ、イーディアムだ！」
「え？　急にどうしたの？」
突然おとなしく席に着くと、ミュークトの手を振り払い、ポケットからくしゃくしゃの紙切れを取り出した。
「どこかで聞いた事があると思ったら、そういうことかよ！」
丁寧に、少し荒く紙切れを伸ばしていく。
そこには円形の、細かい模様の入った図面が現れた。
どこかに取り付けてある図を見ると、何かの部品のようだと伺える。
「だから、どういうことなの？」
「これはな、アイの水力変換機なんだ。」
「……何それ？　あっ！　ヴァシアも気になるよね！？」
全く聞き覚えの無い言葉とヴァシアの視線に戸惑う少年。
危うくまた彼女を空気にしてしまうところだった。
「ああ」
こちらを見てくれているが、関心があるのか、いや無いだろう。
それでもどうにか会話に参加させたい故の力技か。
「簡単に言えば、水の魔力を妖精の干渉の無いまっさらな魔力に変える装置ってこと」
「神族が使う、無属性のやつってこと？」
「うん、まあ、そういうこと」
ミュークトは分かっているか分かっていないか、どちらともつかない表情を見せて頷く。
大分これでも優しい解説だと思っていた側は、少しのショックと戸惑いを受ける。
「あっ！　ヴァシアは、分かった？」
「ああ」
「よ、よかった！」
無理に会話しようとしているために容量を割いているからなのか、頭がついてこないのかもしれない。
いや、元からそうすんなり理解してくれるわけじゃなかったのだが。

「まあこれがな、どうも最近調子が悪くて、ちゃんと動かないらしいんだ」
「へえ……」
何気なく、というよりも当たり前に相槌を打ったはずなのに、ミュークトはクジーアにものすごい速さでにらみつけられた。
「へえ……じゃねえよ！　あのな、これがちゃんと動かないと、火も起こせない水も飲めないで大変なんだ！」
クジーアの今日一番くらいに叫んだ声。
必死になって怒っているのかと思えば、どうやら違う、やっぱり理解してないと思って少しあきれているらしい。
とはいえそのまっさらな魔力で何ができるか、何ていうのを教えてもらってないため、少年は相槌しかできないのだ。
「アイには魔力の強い種族は殆どいない。
　お前みたいなアクアスとか俺みたいなサンスとか、ヴァシアみたいな魔力主とか、魔力の強い種族なら当たり前に魔法で火も水も何とかできるだろうが、そうはいかねえ。
　そんな土地でライフライン切られたら国だって壊滅するだろ」
「う、うん。　そうだね……」
探り探り言葉を捜しているうちに結局また相槌になってしまうが、彼をまた怒鳴らせてはいけない。
少年はそのことで頭が一杯なのか、彼女に会話のボールをパスするのを忘れて、そのまま彼に返すでもなく、自分で持ってしまっている。
「それで、その写し貰ってきて、誰か使えそうなやつ見つけたら戻るって言ってきたんだ」
「使えそうなやつ？」
クジーアはミュークトに、伸ばしてもまだくしゃくしゃの紙を突き出す。
「見覚えあるだろ？」
「無いよ」

「これ自体じゃなくて、ほら、ここととか」
円の中に描かれた五角形の頂点一つ一つについている様な小さな円を順々に指差す。
図形自体が小さく、更にその円も小さく、中に書いてある文字らしきものもとても見にくいが、紙に近寄り、目を凝らして見ようとする。
「水、音、海、羽、雨……あっ！」
少年は何か思い出したようにして、自分自身の左腿の辺りを見て、そして何かを懸命に外そうと金属音を鳴らしている。
「これと一緒だ！」
外したものを机の上に出す。
銀の小さなプレートのついたチェーン。
そのプレート一つ一つに、図の中にあった模様と同じものが刻まれている。
「この円形のやつは、イーディアム盤って言うらしい」
「イーディアム。　ああ、そっか！　さっきクーが言ってた！」
「その前にお前の姓だけどな」
「あ、そうだね」
イーディアムという自分の持つ名が、そんな遠い北の地で使われていたとは。
少年は不思議なものだな、と思いながら、何処となく誇らしかった。
まあ、このイーディアムはとても遠い親戚なのだろうけれども。
「だからお前なら何とかできるんじゃないかと思ってな」
「え？　でも俺、機械とか全然駄目だよ」
「機械自体は俺が見るし、お前はその『イーディアム』の力を貸してくれればいいんだ」
「そっか。　ならいいけど……」
そこで急に少年ははっとする。
「あれっ！？　いつの間にかにアイに行くことになってる！？」
勢い任せで立ち上がってしまったため、自分の座っていた椅子が後

ろにひっくり返ってしまった。
「何だ、行かねえのか？」
「だって遠いじゃん。　アイってすごい北でしょ？」
自分で派手に倒してしまった椅子を元に戻しながら聞いてみる。
思っても居なかった展開と先程の話が絡まって、頭は大分絡まっている。
「大丈夫！　そんなこともあるだろうと！」
そんな心配と不安をよそに、クジーアは紙切れとは別のポケットから真っ青な紙切れを取り出した。
今度のは、皺一つ無く、それに常に色を海のように波打たせている。
「転送紙！」
「何でそんな高級なものを！」
ミュークトは高級品に驚き、身体は後ろに引いていくのだが、それでも生まれてはじめて見るものへの好奇心から、顔だけは近寄っていく。
「向こうの知り合いが、水力変換機について何か情報があったらこれでって、くれたんだ」
「すごいや……」
何処で売っているか、どんな姿をしているか、もしかして架空のアイテムか何かなのか。
そんな、一生見ることなんて無いだろうと思っていたものを、目の前で親友が揺らして見せてくる。
「だから大丈夫。　そういうわけで、早速行くか」
クジーアがそう言うと、手の中で青い紙が光りだす。
先程までは見えていなかった、目の痛くなるほど細かく難しい魔方陣が、青白く紙に現れた。
「あ！　ちょっと待って！」
ミュークトが言うと同時に、青い光はゆっくりと収まる。
「何だよ」
「お皿洗っていかなきゃ」

「洗ってなかったのか？」
「後でやろうと思って水にだけつけてきたの」
少年はそう言うと、机の端に置いておいたピンクのエプロンを付けて台所へ戻って行こうとした。
しかし、少しして何かに引き止められたかように急に足を止める。
「あ！！」
それからミュークトは非常に素早く振り返った。
どうしよう、と顔に書いてある、どうしたらいいのかよくわからないでいる顔で。
「ヴァシア……ごめん……」
いつの間にか彼女を会話に加える事を忘れて、彼の話を理解しようとすることばかりに気を取られていてすまなかった。
そういうことなのだろう。
申し訳の無い気持ちが渦巻いているのか、何処となく疲れているように見えた。
「だから、何故謝るんだ？」
しかし本人は気にしていなかったらしく、何のことか全く分かっていない。
嫌味ではない。
本当に何に対してそう言われているか見当がつかないようだ。
そのお世辞にも可愛げのある顔とは言えない重い瞳であるのに、幼子がするように軽く首を傾げてみせた。
「いや、ええっと……　あ！　ヴァシアはどうする？」
もうよく分からないが、とりあえず質問を投げかけて逃げようとした。
「な、どうするって、何をだよ」
しかしよく分からなくなって投げた質問は、クジーアにキャッチされた。
「い、一緒に行くかどうか！」
「何だ、一緒に来てくれるもんじゃねえのか？」

意外に思ったのか、彼は驚きながら少し残念そうにして強めに言って出てみる。
一緒に来てもらいたい、と言う気持ちを込めて質問を返す。
すると少年は彼に近寄り、耳元で小さく話しはじめる。
「ヴァシアは何か、何か、ね。　いろいろあったみたいだからさ。
　そんないろいろ連れまわしてもいけないかな、なんて……」
話しながら、最初は彼女の方にやっていた視線は徐々に床の方に落ちていく。
出会った時、テルトスアで何かがあったのだろう。
言葉を交わしたとき、引っかかることが起きたのだろう。
「ねえ、どうしたい？　ここ、今は俺……とクーだけだし、誰か来るような家でもないから、嫌だったら家で待っててもいいよ」
床から彼女へと視線を戻し、その水色の目は真っ直ぐに赤の瞳を見ていた。
どうしてそれほどに、少年は彼女を、その目を見つめることができるのだろう、彼は思った。
守りたい、という思いからなのか、ただ単に、話すときは人の目を見て、という教えをしっかり守っているだけなのか。
彼はあの赤い目にうずく何かと、何故か騒ぐ胸を押し付けて、自らその視線から目を外す事はできなかった。
「それにさ……」
「いや、俺も行く」
言葉は急に走り出してきた別の言葉に遮られるようにして止まった。
それと同時に彼女が椅子から立ち上がり、床と脚の擦れる音が耳を通る。
「そっか、分かった。　じゃあ、洗いものしてくるから準備しててね」
「ああ」
愛想の無い彼女の言葉と姿を見てから、少年は台所へ小走りで向かっていく。

そうして今まで追っていた視線が無くなると、彼ははっとして瞬きを数回した後に、手に持ったままにしていた青い魔法の紙を何気なく見た。
相変わらず波打つ青が水、いや、海そのものを切り取ったように見える。
その輝いている、多分魔力の波をただ見つめていればよかったのだが、どうしてもクジーアは気にしてしまった。
目が合っているわけではないから気まずくはなく、気になってしまっただけ。
立ち上がったヴァシアを紙の脇から覗き見てみると、彼女は窓から何の面白みも無い、永遠に広がっていると錯覚してしまうような緑の野を眺めていた。
いや、本当に眺めているのだろうか。
ここからその表情を知ることはできない。
部屋の日陰ですっかり冷たくなった肩当てと、日陰に置いたせいで全く渇いていないグローブをはめて準備を整えると、思ったよりもはやく足音が聞こえた。
「お待たせ！　終わったよ！」
ミュークトは椅子にエプロンをかけ、先程外したチェーンを取り付けながら言う。
「そうか」
彼はくしゃくしゃの紙切れを元のポケットにしまい、青い紙を手に取り、彼女を呼ぼうとする。
すると彼女は声をかける前に、二人のもとへと近づいてきた。
「よし、じゃあ、出発だね」
チェーンの取り付けが終わって少年がそう言ったのとは直接関係無く、彼は何かを思い出したらしい。
「あ！」
「どうしたの？」
「これ、定員二人って言われたんだよ……な……」

クジーアは申し訳なさそうに、二人ともから目を逸らすようにして呟いた。
「えっ！？　それじゃあ誰か残らないといけないじゃん！」
何やってるの、と少しだけ責めながら、少年はどうしたらいいのかあたふたするところだった。
「大丈夫だ。　俺が何とかする」
ヴァシアは言いながら、クジーアの手にしている青い紙に触れる。
途端に紙上の波と彼の心は騒がしくなっていく。
「何とかなるの？」
「何とかする」
赤い目を横目で覗くと、紙と同じように波を打たせているように見える。
光の反射ではなく、それそのものが波打つようして。
「それじゃあ、行くぜ」
彼が紙に力を込めると、さっきと同じ目の痛くなるような細かい魔方陣が同じようにして現れる。
ただその色は、血の色をして輝いていた。
クジーアは驚いて力を弱めようとするところだったが、その前にもう転送が開始されており、紙と身体が少しずつ消えはじめていた。
ミュークトはどうだろう。
さして驚いてはいないようだ。
止めれない状態の中、なるべく光を見ない様にしていたが、どうしても視界にその赤が現れて、まるで誘っているようにたゆたうのを止めない。
彼は赤い誘惑が嫌になって、目を瞑って真っ暗にしてやる。
すると一瞬見えた気がした。
真っ白のワンピースと、青く長い髪をサイドテールにした少女の後姿。
目蓋の中に映るはずも無い姿に驚いて目を開けてみても、もうそこは遠い北の地だった。

2

柔らかな感触で地に足が着くと、ミュークトは辺りを見渡した。
「寒っ！」
それから急激な気温変化に驚いて声を上げた。
でも、先程まで居たスファンの緑一色とは全く違う風景が広がって、少年の心は躍らされる。
元々白かったであろう建物の壁はほんの少しだけ汚れて灰色になり、それよりもやや暗い灰のレンガの道には、魔力的な色をした水色の線が走っている。
そして道行く人々の目や髪は、殆どが魔力の弱いくすんだ色をしていた。
「こっちは年間通して気温が低いままなんだ。　風邪引くなよ」
「あーい」
身体をさすりながら、気の抜けたような声でミュークトは答えた。
「ヴァシアも気をつけてねー」
そのままの緩い声で彼女に声をかけると、そうでもないような顔をしている。
寒さに強いのだろうか、と思った瞬間、小さくくしゃみの音が聞こえて、クジーアは少し笑ってしまった。
「クジーア君？」
ふと、明るい女性の声が、彼の名前を呼んだのが聞こえた。
それから背の低い草を踏む音がした。
足元を見てみるとそこは手入れのされた芝生の上で、周りには綺麗に咲く花が植えられている。
どうやら誰かの家の庭らしい。
「やっぱりクジーア君だったわ。　お帰りなさい」
「ただいま、リル姉ちゃん」
リルと呼ばれた音の主はクジーアの両手を取り、優しく握った。

「この方々が、水力変換機の様子をみてくださるのね？」
「まあ、そんなところだ」
彼女は、彼の後ろで町並みを田舎者丸出しで見ている少年と、鼻を気にしている魔力主に視線を向けた。
「はじめまして。　私はサウストリル水力管理所のリル＝サンスと申します」
「あ、こちらこそはじめまして！　ミュークト＝イーディアムです！」
丁寧に頭を下げて挨拶をする彼女にやっと気づいて、少年は同じように礼をする。
「ヴァシア＝クレンスだ。　よろしく」
彼女は挨拶をすると少しだけだが微笑んで見せた。
ミュークトの家で見ていた限りでは想像できない柔らかな表情に驚く。
「ミュークトさんと、ヴァシアさん、ですね。　よろしくお願いしますね」
改めて軽く礼をした彼女は先程自分の出てきたドアの方へと三人を導いた。
「ここではなんですから、どうぞこちらへ」
まだ辺りを物珍しそうに見ながら言われたとおりについて行くミュークト。
その後に、二人の背中を見ているのか、視線の捕らえられないヴァシアが続いて入っていく。
そして取り残されるようにして、クジーアはそこに立ち尽くしていた。
少し頭を抑えて目を伏した後すぐ、誰にも気づかれないように、その後を何も無かったかのように追って建物の中へと入っていった。

＊　＊　＊

スファンよりも肌寒い気候に合った甘めのホットミルクを飲みながら、クジーアとリルの他愛の無い話が弾んでいた。
「それで、ミュークトのヤツ、羊に追い掛け回されて！」
「ちょっとやめてよ！」
二人は従姉弟同士らしく、世界中を旅していたクジーアが偶然寄ったサウストリルで再会したのだそうだ。
そこで、旅先で分かりそうな人が居たら話をしてみると言ったクジーアに、水力変換機の事を頼んだのだという。
「リルさんまでそんなに笑わなくたって！」
「ごめんなさい、でも、おかしくって……」
でも彼女の、薄い水色の、まるで清流のような髪を見るとどうもしっくりこない。
従姉弟同士にしてはひとかけらも似ていないのが、ミュークトには何だか不思議な気がしていた。
「ひ、ひどいですよ！　っていうか恥ずかしい！」
そんな馬鹿みたいな明るい話をしているにもかかわらず、ヴァシアは前と同じようにカップを両手で包むようにして黙り込んでいた。
ただ、前と違うのは、顔を上げて、話を聞いているらしく、目が対応するように少し動くことだ。
笑うことは無いのだけれども。
「本当にごめんなさい。　水力変換機の話をしましょうか」
必死に笑いをこらえながら彼女は立ち上がって、奥の本棚から割と新しいノートと付箋だらけの古い本を取り出してきた。
それからノートをクジーアに手渡し、丁寧に古い本をテーブルに置きながら座り、付箋の一つを頼りにページを開く。
「最近の様子を書いておいたの。　それと簡単な構成をね」
「ありがとう」
ノートを捲りながら真剣に見つめているクジーアの横から覗いて見るが、ミュークトには何のことだかさっぱり分からないことばかりで頭がいっぱいになってしまった。

「それは専門的なものだから分からなくて大丈夫よ」
フォローするようにそう彼女は声をかけ、古い本をミュークトとヴァシアが見やすいように方向を変えると、説明を始めた。
「この丸いのが、水力変換機の要の盤。盤にはアクアス盤とイーディアム盤があって、サウストリル一体ではイーディアム盤を使っているの」
本に記された二つの円。
家でクジーアが見せたものと同じものと、少しどこかが違うもう一つの円と、それがどこに取り付けてあるかの図や全体像らしき物が確認できる。
他は難しい文体や用語ばかりの解説なのか補足なのかがびっしり書き記されている。
「アクアス盤、と、イーディアム盤って、何が違うんですか？」
「それはね、ちょっと難しいの」
「難しいのか……」
ミュークトは自分から質問をしてみたが、難しいと言われてしまうと少し困る。
「作った人が違うから、ちょっと作りが違う、ってことかな？」
優しく答えを返すリルも、呟くように「ちょっと違うのだけれども」と付けたした。
「でも大丈夫。　私は専門家だから、機械の構造とかは私に任せて」
「もちろんお願いします」
深く礼をするミュークト。
「あれ？」
それから急に頭をあげる。
「でも、機械のことすごく詳しいなら、直せるんじゃないですか？」
素朴な少年の質問に、彼女は少し困ったように、どうしようもないことを思い出すように答える。
「そうね。ただの機械の不具合なら私でも直せるのだけれども、違うみたいなの」

軽いため息がリルの口から落ちると同時に紙を捲る音が途切れる。
「機械には異常がねーんだな、これが」
ノートを閉じながら、心底不思議だ、と言うような表情を浮かべて、クジーアが会話に入ってきた。
それから丁寧にノートをリルへとかえす。
「じゃ、何処が悪いの？」
「そのためのお前じゃないか」
「え？」
何のことかさっぱりわからないミュークトは、からっぽのままの頭で首を傾げてみせた。
そんな少年に彼は少しだけ強く迫ってみせた。
「アクアスの力が必要だと、俺は思ったんだよ」
水というもの全てと不思議な関係で結ばれているその種族の本能にかけるべきだという結論をかえすと、少年は少し表情を翳らせる。
「イーディアムは純正な水の種族じゃないよ」
「でも盤がイーディアムだからいいんだ」
クジーアがそう言うと、納得したようにミュークトの表情が元に戻る。
「そっか」
「ってか、今更イーディアムだーアクアスだー何て言うもんじゃねーって。　そんなの何千年前だっていうんだよ」
「そうだよね」
少し先程より元気になったような、そんな風に見える少年は、背筋を伸ばすように座りなおし、改まったようにして聞いてみる。
「それで、俺は何をすればよろしいのでしょうか？」
気合の入りすぎた表情に少しだけ笑わされながら、彼女は簡単に答えてみせた。
「行けば分かると思うわ」
あまりに簡単に、抽象的に、投げ出したかのようにもとれる回答に、ミュークトはまた頭を空っぽにしてしまう。

「え？」
「ミュークトさんなら何か感じると思うんです」
「感じる？」
「ええ」
少し視線を逸らした彼女の琥珀色の瞳の奥が青くちらついた気がして、少年は言葉にできないものを感じ取った。
それから薄水色の髪に目をやると、先程の、不思議に思って心の中を漂っていた疑問が、急に落ち着いたのが分かった。
「分かりました。　頑張ってやってみます」
「ありがとう」
リルが優しく微笑みをかえすと、一気に残りのホットミルクを飲み干して、クジーアが声をかける。
「それじゃ、行こうか」
「うん」
同じようにリルも席を立ち、既に中身が無くなって冷めたミュークトのカップとまだ暖かいクジーアのカップを回収して、ヴァシアのカップに手を伸ばした。
まだ中身が入っている、というよりも、全く飲まれていないようで、膜が浮いている。
「さげてもいいですか？」
リルが声をかけると、ヴァシアは小さく頷いて、カップを包んでいた手を離した。
「私、今から少し出かけなくてはいけないから一緒に行けないのだけど、大丈夫？」
「ああ」
「よかった。　じゃあ、お願いね」
四人分のカップを抱えながら奥へ入っていくリルに、クジーアは準備をしながら答えた。
その横でミュークトは立ち上がってからゆっくりと伸びをして、大きく深呼吸をしている。

「冷たい空気はしゃきっとするね！」
「寒いのはあんまり得意じゃないんだけどな」
少年を横目に、寒そうにマントの襟に顔をうずめて彼は呟く。
少し前まで一番寒がっていて、何だか風邪もひきそうな感じがしていた人が、今は一番元気なようにみえる。
「ねえ」
「どうした？　リル姉ちゃん」
「ヴァシアさん、行っちゃったわよ」
「え！」
いつの間にかドアを開けて行ってしまった彼女。
どうして全く気づかなかったのか、どうして声をかけずに出て行ってしまったのか。
ヴァシアのことだから、と思えば、それほど不思議に感じないのが不思議なことだ。
「早く追いかけないと！」
とはいえここは見知らぬ地。
急いで後を追おうとミュークトは飛び出して行ってしまった。
「追うっていっても、二人とも道分かんねえだろ……」
重くない大きなため息をついて、クジーアも後を追おうとドアに手をかけると、奥から彼女の足音が聞こえてきた。
「じゃあ、行ってきます」
「クジーア君」
出かける前の挨拶をして外に出ようとすると、彼女の声が少し冷たく聞こえた。
「魔力主なら……」
振り返ることはできなかった。
今の彼女は、あの、自分と同じ琥珀色の目をしていないと思ったから。
「……何考えてんだよ」
少しだけ体が震える。

それは寒さからだけではないと分かっている。
でも、分かられたくはない。
「あれだけの力があれば、変換機の調子をみなくても、今すぐ」
「やめてくれ！」
クジーアは声を荒げた。
何かに急かされているような詰った声が、次々と言葉を吐き出すのを、これ以上は聞けなかった。
「……それは違う、と思う」
呟くように加えた一言が、何も音のない部屋の中で、音もなく消えていく。
しばらくの沈黙の後、彼女が切り返すかのように口を開く。
「そうね、ごめんなさい。　私、どうかしてたわ」
急に取り繕うように早口になって喋る彼女は、慌てて出かける準備を始めたようだ。
ノートと本とを手に取ったような音が聞こえ、そこで音がいったん止まる。
「行ってらっしゃい」
いつもの優しい声に戻った彼女の澄んだ言葉が静かに耳に届くと、彼は手をかけたままだったドアを開けて、外へと踏み出した。
声は出せなかった。
冷たい風が一瞬部屋の中へと漏れこむ。

3

中心街がとても小さく見える程のところまで来た。
薄灰色にうずくまっている街を流れる明るい水色の線は、ちょうどその中心辺りで一回集まり、そこから更にこちらへ向けて伸びている。
「結構歩いたよー。　ねえ、まだなの？」
薄く明るい緑の野を走る線は、傾斜の出てきた丘のふもとを登り始めている三人の足元を通り越して更に伸びている。
「もう少し。　あの建物の中に変換機があるんだとよ」
その線はそのまま彼の指す指の方、まだ小さく見えるが、この先の丘の上に建っているであろう真っ白な建物の中へと続いていた。
出かける間際、聞くとは思わなかった彼女の声が冷たい声がまだ消えない中、クジーアはふと自分の後ろを歩くヴァシアに目線をやる。
案の定、彼女は街を出てきたときと殆ど変わる事無くこの坂を登っている。
たまに少しだけ辺りを見渡したりする他は、ずっと足元を走り続けている魔力のこもっているだろう線に視線を落としたままだ。
そんなことは無いのかもしれないが、ミュークトの家で見たときよりもほんの少しだけ柔らかくなったような表情が気になる。
何かがあったのだろう。
あったとすればあの時、転送紙によってアイヘとんで来た時に見た、あの少女の影が関係しているのかもしれない。
それは仮に、彼女も同じものを、あるいはそれ以上のものを見ていたとするならばの話ではあるが。
だとしたら、果たして何があったのだろう。
登るだけの単純な作業をするにはもってこいの題材に頭を悩ませながら、彼はその影を思い返してみた。
青い影がまだはっきりと、目蓋の奥で揺らいで見える。

「あー！　何でこんなに遠くに建てたのかなー！　すっげー面倒だと思うんだけど」
嫌になってしまったのだろう、二人の後をとぼとぼと歩くミュークトが零す。
はじめは意気揚々と中心街を出て行った少年だったのだが、すぐに薄い緑一色の景色に飽きはじめ、だんだんと子供のように渋々登っているというアピールまでしはじめた。
「それは……施工主の趣味だよ」
「なるほどねー」
クジーアが適当なことを返しても指摘する気力も無いらしい。
それ以前に聞いているのかも分からないような、ぐずった相槌が返ってくる。
「もう見えてんだからすぐ着くって。　もうちょっと頑張れよ」
「十分頑張ってるよー」
幼い子供を励ますかのような言葉をかければ、幼い子供のような答えが返ってくる。
とは言ったものの体力に自信のあるクジーアも、意外ときつい緩やかに長い坂にミュークトのように弱音を吐きたくなってくるようだった。
少しずつ辛くなっていくようで、息を吸っても吸ってはいないような、それか害のあるものを取り込んでいるような息苦しさを覚えている。
最近運動不足だったからかもしれないなと思いながら、知っているはずの本当の理由を胸の奥底へと沈める。
でもそれが理由だとしても、少しおかしい気がしていた。
あまりにも急激ではないだろうか。
クジーアは考えを巡らせ、密かに無理をしながら、何でもないように先頭を登り続ける。
「大丈夫か？」
不意にそう声をかけられて彼は驚く。

何故なら、それはまるで今考えていた事を見透かされたような気がしたから。
そしてそれが、予想していた少年の声ではなかったから。
「大丈夫だぜ、こんくらいよ。　何ともねえって」
振り返って、彼女と合った目を訳も無く逸らし、そっけなく返す。
すると彼女はまた先程と同じように、足元の線に視線を戻して、黙々と坂を登るだけになる。
心臓が変な鼓動を刻む。
頭の中で整理していたものが散らかされる。
少年がああ言ったなら何とも思うことは無かっただろう。
ただ、そう言ったのは彼女なのだ。
今まで殆ど語らず、目も合わせず、他人に興味を殆ど示さない虚ろな彼女が言ったことに何かを感じるのは当たり前の事。
そしてそれが、ちょうどあの瞬間だった事。
俺は心でも読まれているのだろうか。
散らかされたものを一つずつ拾いながら、クジーアは冷えた海風に悴んだ手を握ろうとしてみる。
不自然に動かない指先に、寒さ以外の理由を隠せなくなってきているような気がした。

＊　＊　＊

丘の頂上まで辿り着くと、そこには真っ白なレンガで造られた庭園と、真っ白な宮殿のような建物が聳えていた。
「すごい所だね……。　人住めちゃうよね」
「住めちゃうよな」
かつての町並みもこのように真っ白だったのだろう。
きっと特別な力が働いて白さを保っているであろう庭園の真ん中を、水色の線を辿る様にして進んで扉の前へ着く。
重厚な一枚の白い岩から出来ていると見える扉には、中央に繊細な

魔方陣が刻まれており、その更に中心には水を象徴する紋章である二つの十字描かれていた。
「じゃ、入るか」
クジーアがそう呟いて言うと、後ろに居たミュークトを扉の前へ持ってくる。
「え？」
何がどうして、とよく分からない状況に少年は彼のほうを振り返る。
「扉開けてくれよ」
「どうやって？」
「普通に、手で」
扉を押し開ける動作をするクジーア。
それに答えて、首を傾げながらも同じようにしてみせるミュークト。
どうやら特別力がいる訳ではないらしい。
「こう？」
魔方陣の上に手を置いて押し開けようと力を入れようとした時。
中心に描かれた水の紋章が水色に光り、何の力も無しにひとりでに開きだした。
「何か起きたあー！」
ミュークトははじめ何かやってはいけない事をしてしまったのではないかと少々取り乱していたようだったが、扉が開いていくのに気づいて安心したよう。
微かに床と擦れるような音がして、その分の白い粉を巻き上げながら開いていく扉に、少年は感嘆の声をあげた。
「自動ドア……」
自分で言ってみて、何だか近未来的な響きだったとまた噛締めている様子。
その中で白い煙が徐々に落ち着いていくと、扉の向こうの薄暗い空間へと続いて光る水色の線が辺りを照らすように輝きを増す。
「行くぞ」
クジーアがそう告げて先に中へと一人で入っていく。

その後をミュークトが小走りで追いつこうと中へ入っていくと、また少年は驚いた声をあげた。
「うわあ！」
「何だよ」
彼は振り返り、彼女が少しはなれたままの距離から少年を見ると、その身体全体が小さな星を散りばめたかのように、所々が輝いていた。
「なんか俺光ってるよ！　うおっ！　眩しっ！」
自らが発する光に驚いているのか楽しんでいるのか、はしゃぐ様子を見ながら彼は言う。
「お前の体内魔力が活性化してるんだよ」
「何で活性化してんの？」
光と戯れながら少年は返す。
もう驚いている様子は無く、完全に楽しんでいるよう。
「多分、空気中に水の魔力が溢れだしてるからじゃねえの？」
少し苦い顔を見せ、それを手で隠して答える彼の思考を遮るように、彼女が呟く。
「先に行かなくていいのか？」
感情の乏しい顔ながらも、疑問と提案を投げかけた表情に二人は驚いた。
「そうだね、先行かないと！」
少年は少しだけ驚いて彼女に答えた。
微かに柔らかさを得た表情に気づいていないのか気にさえしていないのか、特に引っかかるという思いも無いらしい。
ただ彼は、どうしてか引っかかるものを感じていた。
先程かけられた言葉から来るものなのか、もっと別の何かなのか。
よくは分からないが、心の中で暗雲が渦を巻きはじめるのだけは分かった。
「……ああ」
クジーアは思い振り切るようにして言葉を零し、率先して歩き出し

た。
二人が付いて来る音を確認して速度を少し上げる。
線に沿いその光りを頼りながら真っ直ぐ進むと、長い間閉ざされてきただろう空間の臭いが鼻を掠める。
奥まで距離はそれほど無く、普通の部屋と大して変わらない奥行きを歩いた後、暗闇に慣れてきた目がその前に何かがあるのを捉えた。
「何かあるよ」
少年はそれを見て報告をする。
「知ってる」
「……これは何ですか？」
からかわれたような返事に少々悔しい気持ちを覚えつつ、彼に目の前のものの名称を改めて尋ねる。
「これが、水力変換機の本体」
外壁や庭園と同じ白のレンガで組まれたような、クジーアの腰ほどの高さまである暖炉のような形状の本体。
その本体へと伸びる足元からの線は、一旦その手前で複雑な魔方陣を組んだ後また一つの線に戻り、中央に取り付けられた円盤のようなものの中心へと吸い込まれている。
「へえ……」
そうなのか、とミュークトが零している中、クジーアは円盤を自分のマントの裾でふきはじめた。
どうやら白い砂を被っていたらしく、そこからは銀色に光る円盤と、それに描かれた五角形のような図形の角一つ一つに見覚えのある紋章が刻まれていた。
「ってか、リル姉ちゃんの家で見せたろ」
円盤を拭き切り、マントについた白い粉をはたきながら彼は言う。
「あ、そうだったね……」
今の今までさっぱり忘れていたのだろう。
さっき思い出したという表情で、少年は申し訳なさそうに答えた。
「で、何をするかまでは忘れてないだろうな」

クジーアが皮肉と心配を混ぜた言葉をかける。
「忘れてないよ！　変換機の、調子を見るんでしょ！」
からかわれたことに対してミュークトが少し声を大きくすると、呼応するかのように体中の光が強く瞬く。
「ああ、そうだな。　じゃあ、頼むぜ」
思いのほか眩しい光に目を細めながら、彼はまた変換機の円盤に触れ、左右に回すようにして動かし、一気に手前に引き抜いた。
すると円盤の差し込まれていた場所から水が勢いよく溢れ出し、白い床を濡らして渡った。
「うわあ！　びしゃびしゃ！」
ミュークトは驚いて後ずさりしながら声をあげ、そのたびに身体の星が応えて煌く。
こうしてみると、魔力の高い人間の身体というのは不思議なものだな、とでも思っているのか、彼女は水を気にする事無く、むしろ少年の騒いでいる様が気になっているようだ。
「靴濡れたくらいで騒ぐなよ、全く」
お前は女子か、などと彼は続けようとしたが、本当の女子はそうでもないらしいのでそっと言うのを止めた。
それから取り外した円盤を床に置くために屈むと、急激に息苦しくなるような気がした。
アイに来た時と同じように頭を抑えて、必死に振り切ってまた立ち上がる。
「違うよ！　ズボンのひらひらが！」
「それはお前が悪い」
何とか今までどおりに返そうと、気を強く持つために、ため息のようにみせて深呼吸をする。
しかし思っていたとおりだ。
吸い込んでいる気がしない。
「……クー、調子を見るっていったってさ、どうしたらいいの？」
少しぐずっているような子供の表情を見せながら、ミュークトは水

の上を慎重に歩いて水の湧き出ている場所へと近づく。
足を踏み出す度に、少年の耳に心地よい音が届く。
水の種族であるからそう感じるのだろう。
少年には彼の姿は見えていない。
「行けば分かるって言われたんだろ？」
「でも、分かんないよ」
ミュークト変換機の前でしゃがみ込み、水のあふれ出てくる所をただ見つめている。
元々考えるのは苦手なのだから、そうなるのも無理は無い。
「なんかやってみたらいいんじゃないか？」
平然を装い壁にもたれかかる彼は辺りを覗う。
ごく自然に少年へと視線をやると、変換機を様々な角度から眺めたり、触ったり、試している。
それからそっと彼女の方を見てみると、同じように少年の姿を見ていた。
クジーアは少し安心する。
気づかれてはいない。
やはり先程の言葉は、ただの偶然で、気まぐれだったのだ。
「やっぱり水なのかな？」
一通り本体を眺めたり、触ったりした後、ミュークトはそう呟いた。
見た限りでは何の変哲も無い、何処にでもあるような水なのだが、
これにこそ問題があるのかもしれないと、恐る恐る手を伸ばす。
「えいっ！」
気合を入れ、思い切って一気に手を入れてみる。
一瞬冷たさが手から身体に抜けていくが、流れは見た目より優しく、
触れているのかどうかあまり感覚が無いような不思議な水。
「……あれ？」
確かに普通の水とは違うとは思った。
しかし、魔力的なものは殆ど感じない。
何も無いと思い、ミュークトが手を引こうとした瞬間。

急に空気全体が水色を帯びた粒子となって光り出し、次々と水の中へと驚くべき速さで飛び込んで来た。
まるで見た目には流星が落ちてくるような煌びやかさがあったが、落下点に選ばれた少年はそれどころではない。
「えええ！　何これ！」
驚いたままその光景を見つめるしか出来ずに動けないでいた。
どうやら粒子に質量は無いらしく、痛みも無いらしい。
恐ろしいものというよりも、むしろ温かいような、心地よいものなのかも知れない。
焦りや驚きの中でも、少しだけ、ほんの少しだけ、楽しいと思える心が残っているような気がする。
辺りの光と同じように、呼応して光る少年の身体の星も、先程よりも一層増して輝きだす。
「止めろ！」
薄水色の光一色で埋め尽くされた遠くの景色から、にわかに声が聞こえた。
焦っている叫び。
耳を突く音に、これは危険なのだと悟った少年だったが、どうしてか身体に思うように力が入らない。
先程までの余裕は全くなくなり、叫び以上に焦りを感じ、訳も分からなくなっている少年は動く事が出来ない。
まるで力が、手から水へと流れていくような感覚が走る。
光の中、次に聞こえたのは、何かが崩れるような落ちるような、鈍く重い水の音だった。
「えっ！？　何が起きてるの！？」
騒がしい魔力の光の向こうで何かが起きている。
でも今の少年の目では、それが何なのか捉える事が出来ない。
不安を更に煽られるような音と色に息が止まりそうになる。
目の前の白が、頭の中まで入り込んでくる。
「止めろ！」

二度目の叫び声を聞きながらも恐怖と何かに力を奪われ続ける少年はもう動けなかった。
ふと目の前で、何か黒い影が動いたような気がする。
その瞬間少年は背中から水の張った床へと倒れこみ、自然と手も水から離れ、光は急激に消滅した。
冷たい背中と暖かな胸に、不安と安心を感じながらゆっくりと目を開ける。
「……えっ」
そこには、思っていたのとは違う、青い影が落ちていた。
「ヴァシア……」
ミュークトに覆いかぶさるようにして倒れていたのは彼女だった。
こんな事をするような彼女ではないと思っていた。
あの声も叫んでいたから、誰なのかはっきりしていなかったが、きっと彼が発していたのだと思っていた。
でも、こうなったのだ。
「どうして……」
動揺したまま言葉を零すミュークトへと数粒の光が吸い寄せられ、それと同時に身体から抜けていった力が戻ってくる。
少年は何度か手を握ったりしてそれを確かめてみる。
問題は無いようだと確認して、ヴァシアを起こそうと肩へ触れると、彼女がゆっくりと顔を上げる。
「死ぬぞ」
短く呟かれた言葉が、その赤い目を通して刺さるように聞こえる。
表情が虚ろであるから、それがどのような意味合いを孕んでいるのか分からなかった。
ただその言葉が重く残るだけ。
「うん……ごめん……」
少年が俯き目を逸らすと、彼女はひとりでに立ち上がる。
この言葉を打ち消す答えが無いということは、そういうことなのだろう。

今までのように首を傾げる素振りも無く、背を向けて辺りを見渡す。
少年はそれを噛締めながら立ち上がり、彼女の後姿を見つめ、その先にうずくまる紫の影にはっとした。
「クー！」
先程までそこに寄りかかっていた彼は、床へと倒れ込んでいた。
「どうしたの！？　ねえ！」
彼女の横をすり抜けて彼の元へと駆け寄る。
呼吸もままならないような苦しい顔。
何かしなければ。
ミュークトは熱を測ろうとクジーアの額に手を当てる。
すると急に小さな稲妻がその手を襲ってきた。
「うわあ！」
少年は思わず手を引く。
少しだけの焦げた臭いが鼻を刺し、手の甲に僅かながら痛みを覚える。
静電気や天候の雷とは違う、魔力の閃光に驚いていると、後ろから彼女が言う。
「触るな」
感情も読み取れない平坦な音程が、短く心を刺す。
痛みに耐え切れず、何か一言返す事も出来ず、ただゆっくりと手を完全に引ききると、少年の横に彼女は並び、彼に触れて続ける。
その手へと伸びる稲妻は、何故か無い。
「俺が、運ぶ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0139n/

Owner Of Spell

2010年12月11日14時19分発行